



Title	蔵田周忠を中心としてみる東京高等工芸学校
Author(s)	亀野, 晶子
Citation	デザイン理論. 2011, 58, p. 116-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53361
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

蔵田周忠を中心としてみる東京高等工芸学校

亀野晶子／京都工芸繊維大学

はじめに

蔵田周忠が赴任していた東京高等工芸の状況を明確にすること。最終的には蔵田の著作から明らかになった蔵田独自の建築觀、住宅に関する考え方を踏まえ、本発表の影響關係を更に突き詰め、加えて実践の場としての型而工房の活動を調査する。そこから蔵田周忠が日本の住環境・室内意匠の変遷の中でどういう位置を占めたか、そして日本の住環境に西欧文化がどのように組み込まれたかの一端を探る事、またそれがその後どうなったかを明確にすることが目的である。

蔵田周忠に注目する理由は1. 著作を多く残していること。2. 教師として多くの人間に影響を残していること。3. 型而工房の主要人物であること。の以上である。

次にキーワード「工芸」についての確認をする。工芸という言葉が公に使われたのは1872（明治3）年の『工部省を設くるの旨』と言われているが、工芸と工業の区別も行なわれはいない状態であった。東京高等工芸学校の前身が東京高等工業学校であったことからも明らかであるが、その東京高等工業学校の図案科の廃止に伴い安田祿造が新聞紙上で発表した『本邦工芸の現在及将来』により工芸の種類、その活用分野、そして工芸に対する教育の重要性が説かれた。そこには美術工芸とかつて工業と同分野で扱われた工芸とははっきりと区別される工業と言う新分野の到来により生じた曖昧な部分を工芸という言葉で一括りに救いだそうとし、その工芸の重要性を強く世間、政府に訴えようとしたことが読み取れる。

そのような状態を経た東京高等工芸学校に蔵田周忠が教師として赴任した時には、日本の輸出産業の柱とする安田祿造の工芸は日本国内の安定をはかるためのものに変化していたとも考えられる。それは第一次世界大戦や関東大震災後も含め日本の社会安定が国を支える基礎として考えられるようになったからであろう。

教育機関「高等工芸学校」

明治の殖産興業政策の一端としての工芸学校の整備は、先ほど工芸のところで見たように日本の輸出産業が大量生産に向かうと同時に招いた質の低下が要因となり低迷し、加えて明治30年頃までに日用品にも輸出販路を拡大していたことと、1894年の実業教育費の国庫補助法の制定が大きく関係している。つまり今までいうデザイナーを要請する事が急務であり、その結果、明治の中央直轄の教育機関、それもデザイン教育機関として東京高等工業学校工業図案科のちの東京高等工芸学校と、東京美術学校図案科、京都高等工芸学校が出来上がったといえる。そしてデザイン教育に対する要望が図案科の設置として現れている。

東京高等工芸学校は東京高等工業学校工業図案科が1918年に廃止されたのち、1922年に新たに東京高等工芸学校として開校した。先に述べた安田祿造の『時事日報』新聞への連載も大きく関係している。工業生産品に対する意識の高い学校として再出発をしている事は設立の目的からも読み取れる。しかし殖産興業のための学校ではあったものの、内部の

方向性としては、輸出産業のみを見ていた訳ではなく、デザインが人々の生活に寄与する可能性を開校当初から視野に入れていた事が初代校長訓示に現れている。

もう一つの高等工芸学校、京都高等工芸学校は1902（明治35）年に創設された。美術教育の振興により京都の勧業を進めようという考え方が発端である。東京高等工業学校工業図案科に深く関わった手島精一による色織・機織・図案3科の学科編成への影響、パリ万国博覧会の出品調査で西欧の実業高校教育視察とともにアール・ヌーヴォーにも触れた中澤岩太それに武田五一が加わり京都高等工芸学校は形作られたといえる。

蔵田周忠と東京高等工芸学校

蔵田の在任時の校長は松岡壽、主な教師陣は六角紫水（本名は六角注太郎）、安田祿造、鹿島英二、木檜恕一、1年だけだが森谷延雄、野村茂治、鈴木太郎等である。日本の近代デザインにとって重要な役割を果たすことになった人々が多く居たことからも殖産興業政策から次の段階に進んだ時期に蔵田が在任していたことが解る。蔵田は1927年より1943年まで室内装飾の授業を持っていたが、在任16年間講師であった。先に挙げた蔵田以外の人々は教授・助教授という職に就いている。蔵田が講師の理由として蔵田が工手学校建築科の卒業で早稲田大学も選択学修だったことと、もう一つの東京高等工芸学校には建築を専門に教授する立場がなかったことが考えられる。

そんな蔵田が必要とされたのは、蔵田の生活に対する志向が軸となる独自の建築觀、住居觀に關係しているのではないか。これは蔵田の著作から読み取れるが建築家として生活に目を向けていたことと、その生活が継続することつまり暮らしていく家の生活する人々

とともに成長するといったことまでを考えていたということである。一様に住宅不足・住宅衛生が問題となり、その解決方法としての合理性が建築の問題とされた時代には紛れてしまいやすいが、近代建築としての住宅の先をみていたことは明らかである。

これを「吾人の住居は如何、家具・什器は如何、衣服及身辺の用具は如何、是人生に欠くべからざる工芸にあらずや。人は如何なる階級、如何なる職業といえども到底工芸と縁を切る能わざるものなり」と説く安田の“工芸が、人が生活することにどれくらい重要か”という考えと、蔵田の“建築に含まれる人々の暮らしの重要性”の共通項として見えてくる。

しかしこれはまだまだ実際の調査をし、確証を得なければならない事柄である。今後東京都市大学の蔵田周忠文庫を調査すること、また蔵田を師とした生徒の資料、その足跡を追うことで調査を進めていきたい。その生徒の足跡の一端として、豊口克平の「バウハウスの理念を語る高等工芸ただひとりの教官」という言葉がある。

また蔵田の交友関係にも目を向けるべきである。そのうちの一つに大阪市立工芸高校も挙げられる。ここでも型而工房のような活動が行なわれていたことも興味深い事例の一つである。

おわりに

蔵田周忠と東京高等工芸学校との関わりが社会にどのような影響を与えたかをみるために、今回はその影響源を整理する事となった。調査・研究を進めることで、戦後日本の住環境の需要者の変遷を受容史という側面から明らかにして行く事が目標である。